

完成 グランシップ。

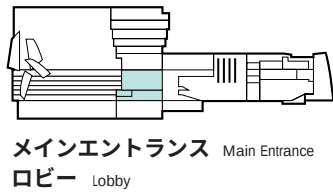
村松友視氏とめぐる 新たな小宇宙。

どえらいものができたものだ。静岡県に縁深い作家、村松友視氏は開口一番、そう言った。平成10年8月31日、それは完成した。地上12階、地下2階建て。高さ60メートルにも及ぶ「巨大な船は、静岡文化という名の港に着岸し、本格的な船出を待つばかりとなった。とはいえ、緑灰色のスレートに覆われた内部は、未だ謎である。延べ6万平方メートルに展開される創造的小宇宙。そして、ついにその日。私たちは村松氏とともに、大いなる好奇心を携えて、その扉をあけたのである。



【むらまつともみ】

作家。1940年、東京に生まれる。慶応義塾大学文学部哲学科を卒業。出版社勤務を経て文筆活動に入る。『時代屋の女房』で直木賞を受賞。昨年は祖父村松梢風の生涯を描いた『鎌倉のおばさん』で泉鏡花賞受賞。ほかに『私、プロレスの味方です』『上海ララバイ』『夢の始末書』『アブサン物語』など。



メインエントランス Main Entrance
ロビー Lobby

設計にあたった磯崎新氏の言葉をそのまま借りるなら、「脇を走っていく新幹線に対して、流線型で呼応する建物」。それがグランシップである。正式名称は静岡県コンベンションアーツセンター。グランシップという名は愛称であり、全国公募によって決定された。

さて、作家村松友視氏がここを訪れたのは、完成から3週間ほど経った9月のある日。生憎、台風の影響を渗ませた雨が、朝からパラついてた。張られたばかりだという広場の芝生も雨に濡れ、一層鮮やかさを増したグリーンがひととき目を引く。氏は、今秋開業のJR東静岡駅からグランシップへと続くアーケードの下で雨をしのぎながら、しばしこの巨大な建物を眺めていた。

「シップ、というのはよくわかるね。静岡には、海に向かっていろんなものを発信していくという、そういうイメージがあるから」そのアーケードのすぐ北側、線路と建物の間は、奈良時代から平安時代初めの東海道、先立つ発掘調査で偶然発見された。「何も物語がからまないような所にポイントと創られたと思ったけれど、そこに古代

の道があったなんて、ちょっと面白い偶然だよな」

そう言っ、再びゆっくりと歩きだす。



メインエントランスにある館内サイン。バルセロナ五輪の公式マスコットを生んだマリスカル氏によるデザイン。

南にあるメインエントランスから入って、左が大ホールで、右は中ホール。エスカレーターを上っていくと、円形のロビー（写真）に出る。

「ホールの入口から客席までの、この空間なり、時間なりが、観客や聴衆にとつての楽屋みたいなものなんだろうね。駅のほうからやってくる、街を歩いている人間から、フィクションの受け手になる。チケットをもぎられたり、エスカレーターに乗ったりしてる間に、観客としての役づくりがされていく。そんなふうに思うんだな」

設計上、このロビーは無柱空間で、上部の交流ホールは、天井から吊られるカタチとなっている。それが宙に浮いたようなスペースを感じさせ、一種独特の雰囲気を作りだしている。「現実の世界から、フィクションの世界へ。そういう意味では、このあたりは虚実が入り交じってる空間なんですよ」

3階ロビーにて

ホールの入口から客席までの空間、時間は
観客にとつての楽屋みたいなものなんだ。





キリスト教も、クラシック音楽も、西洋では「日常」だからね。

一方、隣の中ホールは、客席をゆるやかな曲線に配列。あくまでも聴きやすい、見やすいホールを追求した。木目を生かした格調高い劇場と、自然石貼りのエントランスとの空間対比もまた面白い。

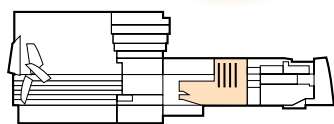
「幕間や休憩時間に、ロビーやホワイエに出てきて、歓談したり、ワインを飲んだりするのは、舞台から降りてきた役者の気分と似てるね。ここで一息入れて、ちょっと熱を冷まして、また舞台に帰っていくという感じ」

グランシップ内にはカフェテリアやレストランはもちろん、ホールごとにホワイエやカフェ、ドリンクコーナーなどがある。

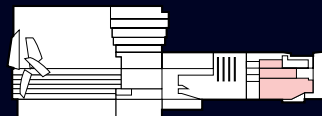
「日本でも、コンサートなんかに行ったら、休憩時間にはワインを飲んだりして楽しむもんだと、そういうセンスが根づいてきたからね。生真面目にクラシックをただ聴く、という感じではなくなってきた。そもそもクラシック音楽なんてのは、西洋だったら、娯楽だもんね。キリスト教とクラシック音楽は、日常だから。そういう日常のものをわざわざ聴きにいくわけだから、どうってことない。カチンカチンにならず、その緊張のあまり、やたら咳払いが出るようなコンサートなんてのも、だんだんなくなっていくでしょう」



【中ホール・大地】最大1,209席。オーケストラピットも付設。



中ホール・大地 Medium Hall - Earth
●客席／固定席747席、可動席457席、車椅子席5席●舞台／主舞台面積404㎡、間口約20.1m×高さ約10.8m●オーケストラピット



静岡芸術劇場 Shizuoka Arts Theater
●客席／最大401席（車椅子席2席、親子室1室4席）●舞台／面積450㎡、間口16.2m×奥行16.2m×高さ12.6m

誰もいない客席から舞台を見るっていうのは、
棧橋で海を見る感覚に似てる。



静岡芸術劇場 SHIZUOKA ARTS THEATER



【静岡芸術劇場】
舞台芸術の理想を極めている。

「ロンドンのグロープ座をモデルとして、これまで東京のグロープ座、水戸芸術館の劇場ときたが、まさにこれは決定版である」と、磯崎氏が語った静岡芸術劇場。グランシップの最も東にあるこの劇場は、SPAC（静岡県舞台芸術センター）の活動拠点でもある。芸術総監督は鈴木忠志氏。その鈴木氏いわく、舞台機構や備品、芸術家が活動しやすいスペースとしては、おそらく日本一。あと20年、30年はこれを超える劇場は出てこないでしょう――。

役者の息づかいが間近に感じられる距離感と、さまざまな仕掛けを可能にした奥行のある舞台。ワインカラーを基調にした半円形の客席空間が、ルネサンス期の英国の劇場を思わせる。そして、そこには最高水準の舞台技術が導入された。

「磯崎さんはもちろん、鈴木さんの情熱も伝わってくるような劇場空間だよな。演劇をやる側からの発想で劇場を創っていく、そして、観客に影響を与えていくってことは、必要だからね」

そして、氏は無人の客席に座りライトに照らされた同じく無人の舞台を見つめる。「舞台の上から誰もいない客席を見たり、逆に客席から何もない舞台を見ると、

ちょっとプラネタリウムに行ったような気分になるね。そこで演劇は行なわれていないんだけど、こうして客席にポツンと座っていると、誰かが一瞬パッと出てきたところなんかを想像してしまう。これは波止場の棧橋で海を見るときの感覚に似てる。そこに好みの物語を頭に浮かべるわけ。ちょっととした森林浴の感覚だよな。フィクションに包まれる、という意味では、非常に面白い時間が過ごせる。これは演劇を観るときの訓練になるかもしれないね」

「じつでスポーツってのはいいね。
空手の演舞なんか、ちょっと見たいね。」

大ホール・海 MAIN HALL・OCEAN

「今、ここは尊厳のある静かな空間ですけれどね。ここにリングを作って、そこに煌々たるライトがあたってね、テーマ曲が流れたらすると、もう、まったくプロレスの世界になっちゃうからね。どこでもできるっていうところがプロレスの不思議なところで、そういえば、昔、駿府公園のテニスコートの真ん中にリング作ってやったのを見に行きましたけど、あれもなかなかよかったですよ」

テニスの公式スペースも十分とれるという、この大ホール。平成15年に静岡で開催される国体では、新体操の会場として使われる予定である。



放空間が生まれるような仕掛けになっている。エンターテイメントやスポーツ、フェスティバル、国際コンベンションに最適。目的やスタイルに比べ得るフレキシビリティも、十分に備えている。この大空間を見渡しながら、「ここでスポーツってのはいいね。空手の演舞なんか、ちょっと見てみたいね」と一言。

「存知の通り、氏は『私、プロレスの味方です』に始まるプロレス3部作を著書にもつ、東西に聞こえたプロレスファンでもある。

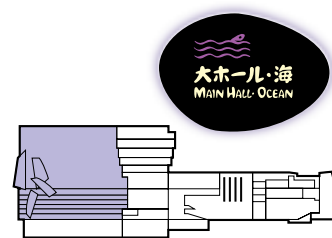
ドーム型の天井からは、ときには自然光が降り注ぎ、正面の大扉を開ければ、西側広場(グランシップ広場)と一体化した大開

「これだけのものを地元だけで成り立たせよう、二杯にしよう、と思うと、難しいかもしれないけれど、ここは日本でナンバーワンのホールなんだと考えて、全国的なイベントを打ち上げる。それも一つの方角でしょう。東京の人も着目しますよ、きっと」

ドーム型の天井からは、ときには自然光が降り注ぎ、正面の大扉を開ければ、西側広場(グランシップ広場)と一体化した大開



【大ホール】最大約4,600人収容。客席や舞台の設定など、ホール空間をアレンジできる。



大ホール・海 Main Hall・Ocean
●客席／固定席1,990席、可動席2,464席、立席約172席(車椅子席16席) ●アリーナ／面積1,720m² ●舞台／面積560m²、間口34.8m×奥行18.0m

フォーラムは交差点、シンポジウムは
酒を飲みながら話すってごとうらしいよ。

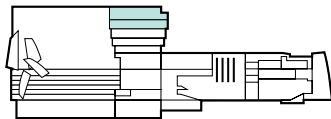


グランシップマガジン—10

機能も果たす。

「フォーラムっていうのは、交差点という意味でしょ。一方、シンポジウムは、酒を飲みながら話すってことらしいんだよね。本来は異なるものなんだけど、みんな、どちらも同じだと思って。どっちにしろ、しかつめらしいイメージじゃないんだよね」
そう言った後、氏は「会議場を流れる空気、参加する人の気分って、結構重要なんだよな」と付け加えた。

実はこの会議ホール、高品質・高機能を極めながら、意外なおまけがついている。壁が一面だけスライド式になっており、会議の



会議ホール・風 Conference Hall - winds
●席数／最大約500席（傍聴席約120席含む）

通訳を可能にした本格的な国際会議場の登場は県内初。大小19もの会議室群を併せもち、さらに光ファイバーで結んだ最新鋭の映像装置によって中ホールと連携できるなど、学術フォーラムのメイン会場としての



230インチ・ハイビジョンスクリーンの前で。

辺境的な地方文化でなく、世の中の 一大事を発信しないと。やっぱり。

静岡で、あるいは日本で初めてという試みが、随所に盛り込まれたグランシップ。この中には、これまで紹介した以外にも、さまざまな空間や機能、仕掛けが用意されている。

たとえば、空間アレンジも自在な3室構成の展示ギャラリーや、コンベンションの際にはレセプション会場として活躍する交流ホール。この2つは隣接しており、一体の展示場として利用することもできる。また、3D映像装置など、最新のAV機器を装備した映像ホールは、会議、研修の場として高機能に対応。このほか、各ホールに付随する施設として、練習室やリハーサル室、楽屋などが充実しており、託児室もある。

「この中には、実にいろんな壁があるんだね。小さな芝居を演るところから、どこかいイベントを打ち上げるところまで、グランシップという空間の中にまたいろんな空間があって、その空間を移動していくと、まったく違った景色が流れていく」
内部をくまなく見て歩くと、ゆうに4、5時間はかかる。それだけ大きく、それだけ見どころも多い。換言すれば、それだ

けのアイデアと期待と予算がそこに注ぎ込まれている、ということ。では、ここからどこに何を発信していくか――。

「日本の中央が東京であるか、という文化を基準にした場合、そうとは言いきれないところもあるでしょう。ある観点から言えば、京都かもしれないし、まったく

芸術の香りみたいなものが 周辺にダークと漂ってくるといういな。

グランシップはいよいよ11月からテストランが始まり、3月にオープン、5月から一般利用がスタートする。そして、現在、周辺整備も着々と進行中である。

まず、隣接する新駅、JR東静岡駅が10月30日に開業し、グランシップ南側には並木通りが整備された。また、遠い先の話になるが、新駅を起点にした文化・ビジネス・生活エリアのゾーニングも徐々に進められている。

「プラハやミラノでは、街と劇場の境界線が滲んでいるというか、それこそ佐茶の世界みたいに、路地からずいっとつながっていく感じがするんだな。劇場の中までグランドーションになつて、だんだん劇的な雰囲気

別な観点では、また違うところかもしれないわけだから。もう、中心と辺境なんて、そんな区別はないですね。だから、ここから発信するものは静岡の辺境的な地方文化じゃなくて、やっぱり世の中の一大事でなくちゃ。そういう舞台であってほしいと思いますよ」

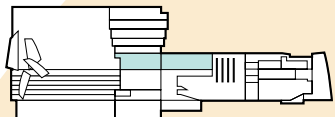
のを感じるのには、せいぜい金毘羅歌舞伎ぐらいで、だいたい劇場の内側の景色と外側の景色がガラッと変わっちゃうでしょ。劇場の外と中が区切られすぎてるんだな。芸術の香りみたいなものが、この周辺にダークと漂ってくるといういな、なんて思うんですけど」と、中ホールのホワイエから窓越しに周辺の一帯に目を遣る。

「別に大層なことじゃなくてね。このあたりに旨い食い物屋があって、来たついでにちよつと食べて帰ると。そういう楽しみがポツ、ポツとあるエリアになれば、面白いでしょ」

そして、氏は「それにしてもスゴイものができたよね」と、最初と同じ一言で締め括り、グランシップを後にした。



展示ギャラリー



展示ギャラリー Exhibition Gallery
●展示面積／724m²（3分割利用可）
交流ホール Reception Hall
●面積／440m²

藤原隆洋 “immunity to pleasure”



GRANSHIP
Opening
Events

来春 グランシップは コレで船出する！

バルーン・フェスティバル

アニメーションウィークス

1999.3/20▶4/4.

1999.4/16▶25



ドクタースランプ 鳥山明／集英社・フジテレビ・東映アニメーション

Xデーは3/13。そして
イベント開幕スタメンは
これ。

1998年夏、ついに完成したグランシップは、11月からのテストランを経て、来春3月13日、本格的な開館を迎える。そして、そのタイミングに合わせて、現在の記念のイベントもまた準備進行中である。そこで今回は、グランシップのオープニングイベントを一挙公開。現在の段階で未定の部分も多いが、それはそれ。栄えある開幕メニューは一体何なのか。人々の期待も大いに膨らむところだが、まずはその内容とスケジュールから紹介しよう。

賑々しく壮大に県民参加。

開館記念式典

開館式典は、まさに出航を祝うセレモニー。グランシップでは、西洋のカテドラルに匹敵するという高さ約58メートル、4600人収容の大空間(大ホール)を使って行なわれる予定となっている。

エキジビションでは、子供たちが県内各地に息づく伝統芸能を披露。また、式典のメインイベントともいえるべき祝賀コンサートでは、日本を代表するオペラ歌手、中丸三千繪をはじめ、内外で活躍するオペラ歌手を招き、県内の吹奏楽団や合唱団と『アイダ』や『蝶々夫人』からのナンバーなどをジョイント

めるイベントが集結。なかでも「アニメーションワークス」と「バルーンアート・フェスティバル」は、大きな目玉となっている。

まず、「アニメーションワークス」では、ミアニメ創世からデジタルアニメまでと題し、〈大ホール〉や〈中ホール〉を使い、今日最もクリエイティブなジャンルの一つに挙げられるアニメという映像文化を文化、歴史、産業の視点から振り返り、未来アニメの方向性を探訪。ジオラマ、フィギュア、セル画などによる歴史ゾーンの設置や制作現場の再現、ワークショップ開催のほか、手塚治虫をはじめとする著名アニメ作家の独特な作品世界も公開。人気アニメ作家や声優によるトークショーも行なわれるので、アニメファンならずとも、ぜひ、出掛けてみたい。もちろんチビッコファンのために、人気アニメキャラクターショーも用意されている。

続く「バルーンアート・フェスティバル」は、グランシップ全体をギャラリーに見立てたバルーンアートの大展示会。バルーンを素材、モチーフに、国内外で活躍するアーティストの作品と、県民公募による同テーマ作品で構成する。あくまでもインスタレーション(ある特定の展示空間や屋外のために特別に制作される作品)が中心であり、常設の美術館では設置の難しい大型作品の出品も期待され、かつてないスケールでの現代美術展となりそう。

ント公演。大空間に響き渡る歌声、光景を想像するだけでも今から身震いがする思いである。

超目玉はアニメとバルーン。

オープニングイベント

さて、一方、開館一週間後の土曜日から、ほぼ1ヵ月にわたって開催されるオープニングイベントには、家族で参加し、楽し

このほか、ミニ四駆大会やプレイランドなど、現代のホビーや伝統玩具を通して、楽しみながら創造力を高める「しずおかおもちゃワールド」、「味」のテーマにショッピングが楽しめる「夢・創造バザール」、気軽に参加・交流できる「夢・未来マーケット」などが、建物西側のグランシップ広場で開催される。



草間彌生「Dots Obsession, 1998」 photo/台北市立美術館

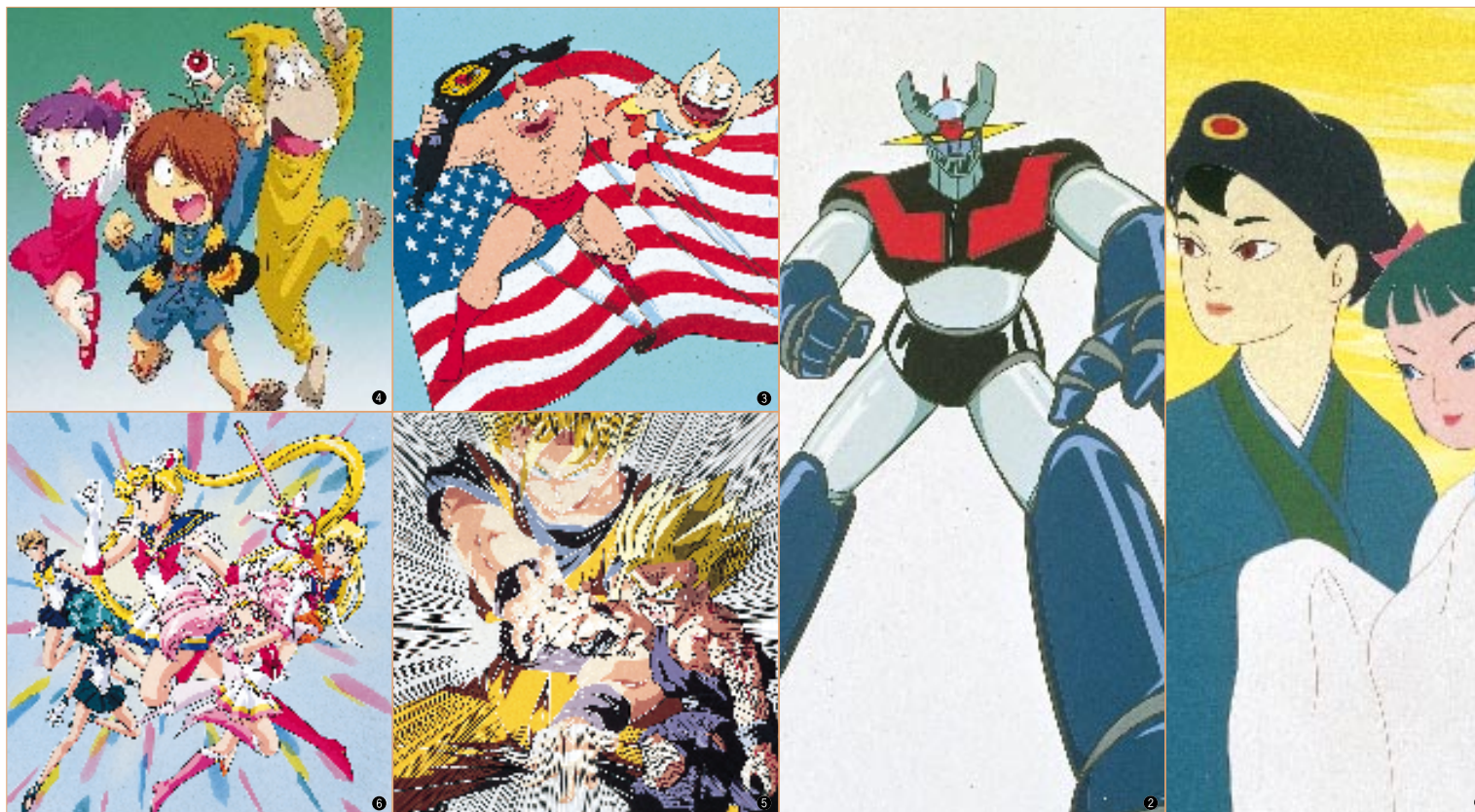


崔正化「The Joke」

バルーンアート・フェスティバル アニメーションワークス

1999 4/16 ▶ 25 1999 3/20 ▶ 4/4

①白蛇伝 ②東映アニメーション ③マジンガーZ ④ダイナミック企画・東映アニメーション ⑤キン肉マン ⑥ゆでたまご/集英社・NTV・東映アニメーション ⑦ゲゲゲの鬼太郎 ⑧水木プロ・東映アニメーション
⑨ドラゴンボールZ ⑩バードスタジオ/集英社・フジテレビ・東映アニメーション ⑪セーラムーン・スーパー ⑫武内直子・講談社・テレビ朝日・東映アニメーション



■開館記念式典

日時：1999年3月13日(土)

会場：グランシップ 大ホール

テーマ：「大いなる船出〜新世紀に向けて〜」

内容：出航セレモニー

祝賀エキジビション

(子供たちによる県内の伝統芸能祝賀コンサート)

(中丸三千繪ほかオペラ歌手と県内吹奏楽団合唱団とのジョイント公演)

内覧会など

■オープニングイベント

「しずおか創造ルネサンス'99」

会期：1999年3月20日(土)〜4月25日(日)

テーマ：「出会いと交流〜夢・創造〜」

内容：◆アニメーションワークス(3/20〜4/4)〜アニメ創世からデジタルアニメまで、監修 おかたえみこ

◆しずおかおもちゃワールド (3/20〜4/4)

◆夢・創造バザール (3/20〜3/22)

◆夢・未来マーケット (4/3〜4/4)

◆バルーンアート・フェスティバル (4/16〜4/25)

キレター 南條史生

イベントや公募についてのお問い合わせは、

グランシップ開館記念事業実行委員会事務局

TEL 054(203)50002

(平日午前10時〜午後5時まで)

日本のアニメーション映画は大正時代にはじまりましたが、商売にするのは困難でした。人件費：1秒に1枚の動画を描くアニメーター、その鉛筆画を透明なセルにペンで写し取るトレーサー、色を塗る彩色係、背景画家にカメラマンなどの給料。しかも映画完成まで資金回収はできず、長い間日本のアニメは零細企業で、長編アニメなどは夢でした。

1956年、新興映画会社・東映が総勢23人のアニメプロ日動映画を吸収し、東映動画を発足させました。ついに日本のアニメが封切館を持つ映画会社に所属し、作品上映の場を確保した瞬間です。東映動画は新人を養成しながら日本最初のカラー長編アニメ『白蛇伝』(58年)を完成、日本の商業アニメの本格的な第一歩を歩きました。

デイズ丁に学びつつ、日本と東洋の物語を題材とした東映動画は3本目の長編『西遊記』(60年)で構成に人気漫画家の手塚治虫を迎えます。かねてからアニメに意欲を抱いていた手塚は制作中にアニメ全般を学び、やがて虫プロダクションを設立、アニメ制作に向いました。夢は芸術的・実験的な短編でしたが、短期間に収入を得る目的で30分テレビアニメシリーズ『鉄腕アトム』(63年)を企画した結果、毎週30分のアニメ放映という作業の激流の中で、虫プロはテレビアニメ専門プロとなってゆきました。「アトム」は大ヒットし、ここから日本独自のアニメ路線、30分テレビシリーズ時代が始動します。現在の日本の商業アニメを支える幹部スタッフの大半はこの時代の東映動画と虫プロで育った人たちと言え、その大量の人材が30分アニメ番組群の制作を可能にしたのです。

初期のテレビアニメは作画枚数も少なく、飽きられて一時期落ち込みますが、数

年後に作画技術も演出も急激に進歩し、スポーツ根性ものや時代劇など、劇的なアニメが主流になります。東映動画長編も「白蛇伝」から10年目、「太陽の王子・ホルスの大冒険」(68年)は高畑勲と宮崎駿がデビューする画期的な群衆劇でした。彼等の活動は東映動画を果立つたのち、やがてスタジオジブリ創設へとつながってゆきます。

以来、全般に日本のアニメはドラマ的になりました。日本ではギャグアニメが育ちにくいのですが、そのまじめ路線の中でテレビに映画に愛され続けた「ドラえもん」の魅力が際立っています。

どんなアニメも、その国の子供たちに、大衆に、受け入れられ、愛された時、大発展します。世界各国では、その国の人々の好みに応じたアニメが育ちました。日本の商業アニメ史は東映動画に始まる長編アニメ路線が40年、「鉄腕アトム」以来のテレビ用30分アニメ路線も35年。実にさまざまな作品が誕生し、石油ショックの翌年、混乱の中から「アルプスの少女ハイジ」と「宇宙戦艦ヤマト」が生まれ、次いでアニメブームが来たことなども忘れられません。こうして、どの国も追いつけないアニメの量と多様性が、その背後のマンガの大河と共に、いま世界の人々を魅了しているのです。

ミニ日本商業アニメ史

アニメーションワークス監修

アニメーション研究家・映画評論家

おかだえみこ



ちね、大衆に、受け入れられ、愛された時、大発展します。世界各国では、その国の人々の好みに応じたアニメが育ちました。日本の商業アニメ史は東映動画に始まる長編アニメ路線が40年、「鉄腕アトム」以来のテレビ用30分アニメ路線も35年。実にさまざまな作品が誕生し、石油ショックの翌年、混乱の中から「アルプスの少女ハイジ」と「宇宙戦艦ヤマト」が生まれ、次いでアニメブームが来たことなども忘れられません。こうして、どの国も追いつけないアニメの量と多様性が、その背後のマンガの大河と共に、いま世界の人々を魅了しているのです。

デジタル導入でアニメの作り方も変わりはじめました。けれど、どう作ろうと、観客に愛されなければ生き残れない点は少しも変わっていません。ここからのアニメがどうなるのか、どうあるべきか。グランシップに展開するアニメーションワークスが、ちよっと立ち止まって振り返りながら、考えてみる機会になれば、と思います。

グランシップというこの特徴ある建築をどう使うか、と考えたときに、普通の展覧会ではだめだな、と思いました。それで最近私が台北の美術館でやった『台北ピエンナール』で、巨大なバルーンを使ったことを思い出したんです。その美術館には地下2階から地上3階までの吹き抜けの中庭があるのですが、そこを日本人のアーティスト草間彌生さんの作ったピンクの巨大なバルーン7個で埋めました。これがすごくうまくいったので、今回はバルーンに焦点を当ててみようと考えたわけです。

実際、最近の現代美術ではバルーンを使った作品がすごく増えてきています。それはたぶん現代美術のアーティストというのが、いつも新しい素材や表現の可能性を追求しているからでしょう。そこで本展では、大きなホール空間にバルーンを2、3段階に重ねておいたらどうかと考えています。ロビー空間や会議室もうまく使っていきたいと思います。また、広場にはできれば子供があそべるようなバルーンをおければと思っています。作家は10人程度を予定していますが、展覧会としては万人が楽しめる要素を取り込んで、今までに見たことがないようなユニークな展覧会にしたいと思っています。

私は美術、特に新しい現代の美術というのは、歴史的な遺物としての美術品とは違って、この社会の中で我々と共に生きていくようなものだと思うのです。私は現代美術に関わってきて、いつも一般の人たちにそのおもしろさをどう理解してもらえただろうか、ということを考えてきましたから、その意味で現代のこうした美術が一般的な

万人が楽しめるユニークな展覧会を。

バルーンアート・フェスティバルキュレーター

美術評論家・キュレーター

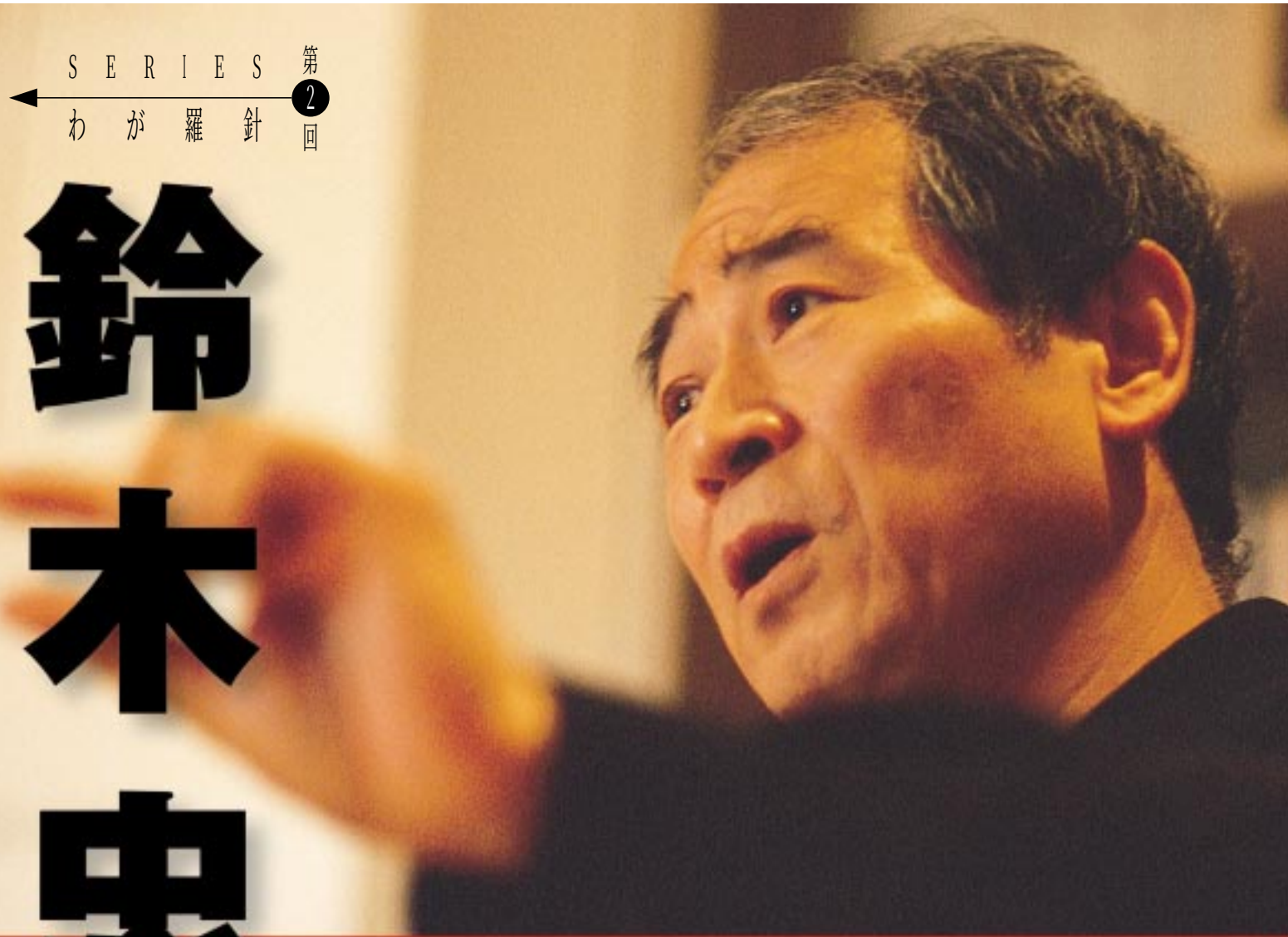
南條 史生



場所、美術館でない場所に出てきて、広くあらゆる種類の人たちに見てもらえる、評価されるという場を作ること、すばらしいことだと思うのです。広場に作品を設置するパブリックアートが隆盛になってきていますが、それも今のような観点から、とても重要だと思っています。日本の現代美術の状況は決して良くはありませんが、それはなによりも一般の人たちが美術、特に新しい美術に無関心だからです。そして、若い作家の作品の市場も大きくありません。それを支えるシステムも貧弱です。だから、多くの若い作家が海外に出ていきます。もう少しこうした新しい美術を楽しむ能力を持ってもらいたいと思っています。

一方、日本の作家たちはよく頑張っていると思います。まだ40代で海外で評価されている人が10人以上いますが、それは世界的に見ても多いほうだと思っています。どこの先進国でも国際的に知られている作家の数はそんなに多くないのです。それを考えると日本はいい作家を何人も持っています。今回は、そうした人たちにも参加してもらう予定です。

現代の美術は、実際にはとても楽しく、アイデアも豊かな世界です。これは発見、発明、技術革新などに強いという静岡の風土には合っているのではないかと思います。今回の展覧会で、こうした新しい美術のおもしろさを知ってもらえたらと思っています。



鈴木忠志

芸術総監督の名のもとに。

「地域のお飾りとしての芸術総監督なら、私のやるべきじゃない。文化振興とはある種、精神のベンチャービジネスですから、中途半端なことはするべきではないんです。いざとなればきちんと責任をとる。それだけの覚悟はもちろんありますよ」

【すずきただし】演出家。39年、静岡県清水市生まれ。早大卒業後、別役実らとSCOT（旧：早稲田小劇場）を結成。82年より、富山県利賀村で世界演劇祭利賀フェスティバルを主宰。89年、水戸芸術館の芸術総監督に就任。国際的な活動の傍ら、地域の文化振興の旗手としても活躍。「静岡県舞台芸術振興構想」にも深く関わる。95年、財団法人静岡県舞台芸術センター（SPAC）の芸術総監督に就任。シアター・オリンピックス国際委員。

文化というもののチカラ。

氏いわく、文化とは動物性エネルギーを燃焼することである。そして、その日、氏はまさにそうしたエネルギーを燃焼するがごとく、文化というものについて、求めるもの、夢見るものについて語った。言葉の端々に見え隠れするものは氏の大きな決意と覚悟。また実に不思議なことではあるけれど、その口調が厳しさを増せば増すほど、人間的なやさしさにあふれた氏の姿が一層浮き彫りにされるのだった――。

——静岡県と舞台芸術。この関係とか、構想がどんなことに端を発するのか、とても興味があるのですが。

「早い話が文化の面で名物を創ろう、と。だいたひ静岡県の名物というのは、自分たちの手で創ったものじゃない、自然がくれたものですね。富士山だって、みかんやお茶だって、駿河湾だってね。でも、外国で日本を思い出すとき、イメージはほとんど静岡県にあるものなんだね。富士山とか、お茶とかうなぎ、みんな静岡県でしょ。静岡は日本を代表するイメージの地ですよ。ところが人工的に何かあるかというところ、確かに工業製品はあるかもしれないけれど、文化的なものはない。世界的に通用するようなもの、という意味ではね。それでも、まあ、浜松の方は産業と結びついた音楽というものがあつて、伊豆も文学の舞台で有名だし、流行歌にも唄われてたりする。で、県の中にも何か欲しい、ということになって。じゃあ、舞台芸術ではどうだろう、と、5年ほど前ですかね。それで私に話が来たのだと思いますよ」

——その頃はもう水戸芸術館で芸術総監督を務めていらしたわけですね。地方行政と四ツに組んだ文化改革ということで、当時注目されていた……。

「そうです。水戸がなぜ有名になったかというところ、文化施設にソフトを付けたんですね。劇団と室内交響楽団というソフトを創った。それで年間の市の総予算の1%をここに使おう、と。これはね、議会がよほど理解しなきゃできない。京都市が爆撃されなかったのは、そこに世界に通じる

文化遺産たるものがあつたからだという人がいますが、私もそう思うんです。それが文化というもののチカラです。で、水戸市を日本のウィーンのようにしたい、と当時の市長さんは考えていたんです。そこら辺はハッキリしてましたから。それならば、とやらせてもらったわけです」

——で、次は所縁のある静岡県で、と？
「別に故郷だから、というわけではないんです。文化の大事な部分を担い、夢のある仕事ならば、辺地だろうがアフリカだろうが、どこだっていいですよ。スポーツ選手と一緒にですね。今、自分がやつてることの質を下げない、そういう環境が確保されるかどうかの問題なのであつて、あとはどうでもいい。人里離れた場所でもいい、集団の活動拠点を造ってほしい、とは言っただけです。そうしたら、おそらく行政史上でも珍しい速さで施設ができた。もともと静岡県の民度は高いですからね。理解されやすい土壌ではありましたが、それにしても速い。もう東京市場との仲介役のプロデューサーは要らない、地域を理解し、そこに根づいてくれるプロデューサーが一つの文化の方針を持って事業を進めていくべきだ、と言ってくれた方もいました。静岡県にはオリジナルのソフトが必要なんだ、と。そういう人がいなければ、静岡県には来なかったかもしれません」

——そのオリジナルなソフトというのが、SPAC(静岡県舞台芸術センター)ですね。「普通は大きな会館があつて、その館長になつてくれ、という話のカタチがあつたりしますよね。でも、それは私の役割ではない



◆稽古場に。『五感が冴えていて、バランスのいい人こそが魅力的であり、素晴らしい、というのが私の価値観です。そして、そうあるための鍛錬なんですよ』

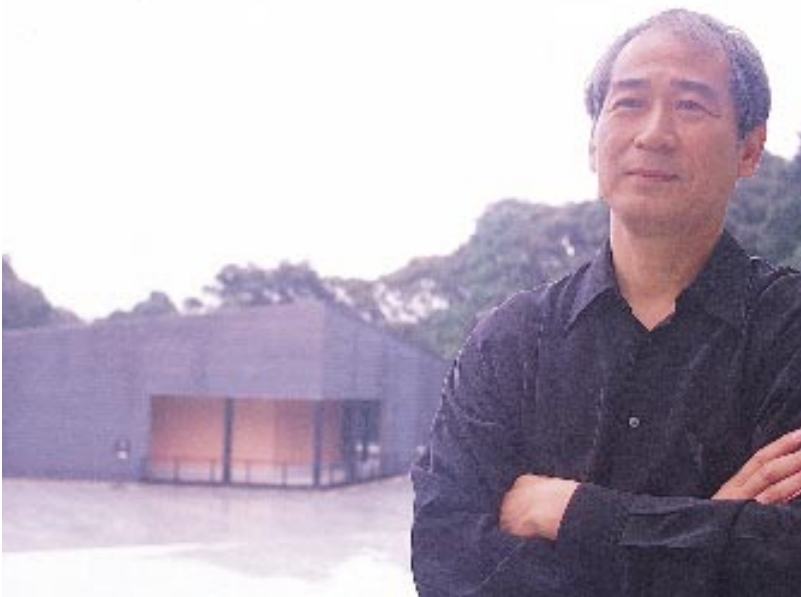
んですね。私は芸術家だし、実際に行動する人ですから。それで私はまず事業集団をつくらせてくれ、と言っただけです。優秀な人間のグループ、プロの芸術集団を作る権限と予算が保障されないと困るんです。医学でいえば、医師団ですね。そうすると、それが産婦人科なのか、外科なのか、演劇なのか、ということ。つまりダンスなのか、演劇なのか、ということです。私としてはこの事業団は基本的には演劇だけれど、将来的に総合病院にしなければ、オペラも、ダンスも、シンフォニーも加えて総合舞台芸術集団にすればいい。できることならそのほうがいいと思ってるんですけどね。とにかく制度改革や文化振興というのは未来を考えてやるものですから、優秀な人間がいて、何年かけても実現するという覚悟がなくては。ある意味で精神のベンチャービジネスですね、これは。ソニーが町工場から始めて世界のソニーを築いたように、非常に情熱をもった人——まあ、吉田松陰みたいな人でもいいんですよ、山口県の萩の方で塾を開いてるみたいにな——そういう連中がまず中核にすることが重要なんです」

演劇とは知的なレジャーである。

——ところで、とくに芸術家としての立場から、ときには行政との関わりから解き放たれたと思うれることもあるのでは？
「もちろんですよ。(笑)ある面から見れば、杓子定規で夢がなさすぎますからね。」

一生こんなことはやれないなと思うことはありますよ。でもね、今の目標は文化によつて県民の生活を少しでも豊かにすることだから。そして、自分のふるさとは富士山やお茶以外にこんな凄いものがあると、みんなが誇りに思ってもらえるものを創るという夢はあるわけですから。今でもギリシャの人は自分の国には素晴らしいものがあるんだと威張ってるでしょ。2千年前の先祖が偉かったわけだけど、そういう先祖になりたいという夢はある。(笑)それからもう一つ。若い頃は自分のことしか考えられないけれど、あるところまできたら、少しでもいい環境を後の世代のために創らなきゃいけない。それは社会的地位や影響力をもつ人にとっては当然しておかなければならないことです。確かに煩わしいことですが、だからといって自分だけ澄んだ心境でいる、というわけにはいかない。なぜなら演劇は集団芸術だから。一つの場所を占拠して何百人、観客も含めれば場合によっては何万人という人を動かすんですよ。このSPACの設立にしても、何人の人が苦勞したかわからない。人と人が非常に接触してる、一種の社会活動であり、責任というものがある。目標達成までの過程には失敗やトラブルはあるでしょうけど、それを前提として、にもかかわらず目的のために情熱をかけて成功させるといふ、強い決意と覚悟がない人は行政とはやらないほうがいいんです。民間と違って制約の多い世界ですから」

——早稲田小劇場(現SCOT)の設立に始まつて演劇一筋にかれこれ40年というところ



◆学生演劇を母体に早稲田小劇場(現SCOT)を結成。70年代の演劇シーンに多大な影響を与えた。

こうですが、舞台芸術を創造していく醍醐味、面白さはどこにあるとお考えですか。「演劇はカラダを動かしたり、鍛練したり、という動物的なエネルギーを楽しむ知的なレジャーなんです。知的というのは、人間について考えたり、他人を観察して生き方についての考察を深める、ということかな。そういう意味ではスポーツは知的なレジャーではないんですよ。演劇には人間についての発見を競っているところがあって、それはスポーツのように勝ち負けではなくて、個人のかげがえのないユニークさの発見なんです。たとえば木を見るとき、この枝ぶりがユニークであるとか、ユ

ニークな花を咲かせるだとか、そんな風に見える。だから、松はダメで樺なら素晴らしいという建築資材としての評価とはまったくの異なる見方なわけ。一つのものさしで測れるような画一的なものではないんですね。そのように人間を見る、ということが実はとても知的な作業なんです。そういうかけがえのないユニークさが集まって森を形成してる。それが舞台芸術、集団の事業というものであり、そうした発見の一つ一つが素晴らしく、また面白いのだと思っているんです」

——最後に今後、挑戦される新しい試みなどについてお聞かせください。

「今考えているのは日替わり公演ですね。外国では、レパートリーシステムなどと呼ばれてますが、毎晩演目が替わり、上演する曜日も変化するわけです。それを木金土日で週4本、3ヵ月から4ヵ月間演るんですよ。たとえば1週目の木曜日に『リア王』をやったら、2週目は金曜日とかね。そうすれば、仕事の定休日の都合で金曜日に行けない人には、土曜日にめぐってきたり、遠くから来る人も都合がつけやすいですよ。おそらく日本では初めてだと思うのですけれど、こういうことも専用の劇場をもっているからできることなんです。こうした劇場の運営なりシステムなりが定着していけば、これもまた地域の財産になる。グランシップの中には、世界の水準の先端をゆくような『静岡芸術劇場』が完成したことですし、県民のみなさんには興味をもって末長く見守っていただきたいと思います

◆チェーホフやイブセンの戯曲を原作とし、日本の大衆に支持された流行歌を使って創作された『流行歌劇・悲しい酒』は、SPAC創立1周年記念公演としてこの秋上演。
(写真提供／静岡新聞社)



◆昨春、有度山の舞台芸術公園が完成し、8月の柿落しでは『夢・真夏の道の』(振付/ジャン・クロード・ガロッタ、グループ・エミール・デュボワ)を上演。
(写真提供／静岡新聞社)



◆氏が編み出した独自の演技・訓練法“鈴木メソッド”。日本演劇界において、このメソッドほど特異で厳密な演技スタイルはないといわれる。
(撮影／古館克明)



◆76年に合掌造りの劇場「利賀山房」(富山県東礪波郡利賀村)を開く。第一回公演は『宴の夜・一』。
(撮影／小川泰祐)

